

【書評】伊東恵深著

『親鸞と清沢満之——真宗教学における覚醒の考究』

〔春秋社、二〇一八年一月〕

松 山 大

本書は本学准教授として後進の育成に努めている伊東恵深氏（以下は著者）初の単著で、大学院生時代より最近までの研究成果の中から本書主旨に合せて選定した論文集の体裁をとる。因みに著者はこれまで『教行信証大綱 曾我量深講義録 上』と『真宗大綱 曾我量深講義録 下』（共に春秋社、二〇一一年）を共編者として、また『華嚴思想と浄土教 中村薫博士退任記念論集』（文理閣、二〇一四年）と『曾我教学 法蔵菩薩と宿業』（方丈堂出版、二〇一六年）は共著者として上梓した実績があり、その他多数の論文が公刊されている。

さて、本書の内容は日頃の問題関心を親鸞聖人（以下は全て敬称略）及び清沢満之（以下は清沢）の思索に尋ねた主体的研究であるものの、著者の主張姿勢はあくまで抑え気味である。それゆえ評者がその真意を読取れているか懸念が残る。そこでまずは本文の読解を提示した後に批判していきたい。また「名は体を表す」というが、文章の内容は精錬されて題名に現われる。はじめに本書内容の骨格を本文目次より確認しよう。

序 問題の所在

第Ⅰ部 親鸞論 群萌における覚醒の様相と内実

第一章 横超の仏道

第二章 信心獲得の内実―「現生十種の益」の文を中心として

第三章 「行者のはからい」考

第四章 真仮の分判―「化身土巻」の思想的意義

第五章 親鸞晩年の思想課題―「消息」を手がかりとして

第六章 悪の自覚道―真宗の人間観・救済観

第Ⅱ部 清沢満之論 「他力門哲学」における覚醒の様相と内実

第一章 「他力門哲学骸骨試稿」の思想的位位置

第二章 清沢の「宗教」観

第三章 有限と無限

第四章 心霊の開発

第五章 他力門における覚醒の構造

結 一切群萌の救済

一見して各部の題名に共通している「覚醒の様相と内実」に目が行き、親鸞と清沢から覚醒を学ぶことを著者は主眼としているのがわかる。続けて、「序」と「結」を除く各章を個別に概観しよう。第Ⅰ部は親鸞の思想から私たちに実現する覚醒とは何かを考察している。第一章では「内在」と「超越」ということばを手がかりに「親鸞思想における覚醒の様相とその内実」（二三頁）を論じている。そして、親鸞の教えを横超思想と二種深信に求め、清沢の教えを例証しながら人生の立脚地を求めている。その結果、「我が身についての徹底した自覚を通して開かれてくるのが、浄土真宗の覚醒」（二六頁）であり、この覚醒が「人間の真の救済の可能性と精神的目覚めのあり方」であるとの結論に導いている。

第二章では、本願力回向による信心獲得の内実と親鸞による受け止めを考え、特に「現生十種の益」の文から衆生にもたらされる利益を考察している。まず、現生十種の益が浄土往生の真因、すなわち真実信心が成就すると即時に獲られることを示し、横超思想をふまえて自然に起こる功德であると述べる。そして十種の益の中でも特に「常行大悲の益」に注目し、仏の大悲の願心が衆生を救うという親鸞の了解があるとしている。その上で現生十種の益でなく、真心の獲得が凡夫にとっての目的であるとする。つまりこの利益とは信心を得た真仏弟子に成就する功德であり、衆生の根本問題が信心獲得であると結論づけている。

第三章では、真実信心の獲得を妨げる「自力」すなわち行者のはからいと、それを克服する道について論じている。まず「はからい」を自力の身（信）と領解し、他力が願心による回向成就であることから自力無効を確認したうえで、人間理性が自己救済の根拠にならないことを述べている。そして自力執心の廃捨は本願を信じるところに

自然に可能となるとする。ここでも救済の根拠は人間でなく仏であると確認している。

第四章では、浄土を真仏土・化身土とする「仏土に眞仮を分判することの必然性とその意義」（六三頁）を確かめ真宗の正意を考察している。そして化身土の開顯は宗教的覚醒の内実と歷程であるとする。そのうえで方便が眞実に根拠を持ち眞実に至らしめることと領解し「化身土卷」の性格を確認している。また、既覚醒の自己を語る「真仏土卷」とは内実において非対応であるとし、「化身土卷」の思想課題を様々な角度から検討している。この結果、親鸞が「化身土卷」を書いた目的は化身土の開顯でなく、衆生の現実である信心の不純粋性を解明するためと結論づけている。そして本章最後には、本書における課題への一つの回答として「化身土卷」は（中略）信の内景に潜む自力執心を照破する。これによって、一切群萌が眞実信心に目覺めていく歩み、すなわち宗教的覚醒へと至る道程とその内実を教示する」（八五頁）と提示している。

第五章では親鸞晩年までの思想課題が一貫していたことを論じている。まず親鸞直筆の書簡から思想を課題にしたものを抽出し、いわゆる「如来等同思想」について考察している。そしてこの課題は『教行信証』執筆時、既に究明されていたと論究している。結果、親鸞の人間観・救済観を明らかにしたうえで、晩年の書簡にある現生正定聚・住不退転の仏道・本願力廻向という阿弥陀の普遍的救済が親鸞の生涯を通しての課題であったとする。そして、この課題こそが本書の主旨である覚醒の内実であり、つまり信心獲得であったと考察している。

第六章では曾我量深（以下は曾我）の思索をふまえて悪人について考察している。ここでは曾我の思索は当然のこと、善導・親鸞・蓮如・清沢などの引文から求道心・深信自身・唯除・内懷虚仮・南無阿弥陀仏の主・露悪者と

いろいろな術語について考究している。そして「悪の自覚道は、本願の仏道である」(一二七頁)とし、我が身の事実を自覚する所に他力の大道が開かれる、と前章までの内容を補完する位置づけをしている。

第Ⅱ部は論考「他力門哲学骸骨試稿」(以下は「試稿」)を中心に清沢の思想的意義を探索している。そして『宗教哲学骸骨』等の他著作の検討も交えつつ、私たちに実現する覚醒の内実と過程を論述している。これをふまえ第一章から概観してみよう。まず『宗教哲学骸骨』と「試稿」執筆までの清沢の行実と両著作の関係を確認している。そして、結核罹患・宗門学事を乗り越え、他力の救済に行き着いたとする。そのうえで先学による科文を参照しながら「試稿」の内容を(一)宗教とは何か、(二)有限と無限の関係性、(三)有限はどのように無限へ転化するか、(四)有限が無限へ至る修行はなにか、と領解している。そして、それぞれの内容を第二章以降第五章までに各々検討していくとする。

第二章では、清沢の宗教観を確認している。すなわち「宗教は有限無限の調和」(一五九頁)であり、南無阿弥陀仏の一念に実現するものとする。そして清沢にとって道理(哲学)と信仰(宗教)は両輪の関係にあったが、療養生活を経て、精神的苦悩からの解放や自己の救済を宗教の定義の中心に置くようになったとする。

第三章では、清沢が有限と無限の関係を「異格の関係」(一七〇頁)としながらも、救済の道理として有限と無限が一致する可能性を主体的かつ求道的に求めていたとする。だが理論上同一体であるとした有限と無限も自身の療養生活の後には、無限は有限の外にあるという現実直面し、自力に破れ他力の救済を抛り処としていったとする。

第四章では、清沢が、有限が無限に進化する可能性を人間の靈魂の究明を通して行なっていたと論じている。まず靈魂の觀念の定義を求め、その上で靈魂とは異なる精神作用としての心靈の究明から、人間の意識発展と同様な進化の可能性を高めるものとする。他方で、有限と無限との変化を表現するには仏教のことに依らねばならなかった、としている。

第五章では、清沢は、自利・利他・方便について、これらは人間には不可能で神仏には可能と了解していたとする。そのため因縁果の法則に従うと、有限が無限に到達するには無限による縁が作用しなくてはならない。これは自己の外部に縁を認める他力門の立場から救済を論じるものであり、「試稿」執筆時において有限における覚醒が明らかとなっていたと論じている。また清沢は浄土を無限協同体として開顕したうえで、「死後往生の觀念を破って、他力救済の現在性を明らかにしている」(二四五頁)としている。結果「したがって「試稿」には他力門哲学の覚醒の構造、浄土真宗の救済の精髓が披瀝されている」(二五一頁)と結論づけている。

次に本書の中身について、まずは本書の成り立ちについて述べたい。前述したが、本書は著者の既発表論文から本書の主旨に合うものを選別し編輯されている。それぞれの研究発表で継続的に思索を深めている様子が巻末初出一覧の発表年次から伺い知れる。また、著者がそれら研究成果の抜本的な見直しを行い、大幅な改稿加筆をし、構成を洗練させるため、複数の論文を一体化して章を構成したり、再編成・分割し章を跨ぐ配置にしたりするなど苦勞の跡が見える。ところで、著者は「先達が明らかにされた研究成果を上回るものは乏しく」(二七八頁)と謙遜

するが、長年仔細に考究が続けられている親鸞の教学から新奇な解釈を導き出すことの困難さは評者も同意できる。この点では著者の述べるとおり、むしろ親鸞の教えが現代に通じることを追求した本書は、著者独断による解釈を廃した手堅い研究成果の積み上げといえる。このため、親鸞の思想に普遍性の有無を問うには適切な手引き書となるのではないだろうか。

一方で門外漢の評者にとって、第Ⅱ部で展開される、清沢に関する研究の新規性について言及することは困難である。それでも第Ⅰ部と比較し全体を通してみる時、若干趣が異なるように感じられる。これは評者の読解力不足と自覚する所だが、清沢の文章からの引用とその解説という形式の文章が多くみられ、著者の主張があまりに表れていない。第Ⅰ部が論考形式であることと比べると第Ⅱ部はむしろ解説形式の感さえある。とはいえ、この過程は清沢の思索を確認し、またその独自性を表わすためにも重要である。そこで評者は、『観経』序分の範囲を善導が一変し楷定したように、第Ⅱ部においては第四章までが序論であり第五章が本論であると考えてみたい。すなわち、著者は第四章まで清沢の行実を丁寧を確認し、著者の主張は第五章に配置していると考えている。

次に本書の題名に、主題として「親鸞と清沢満之」とある。全篇を通じて、この二者に教えを聞く姿勢で一貫しているが、あくまで研究対象紹介であると推察する。むしろ本書編輯の動機は副題とした「真宗教学における覚醒の考究」にあらう。こちらにも「序」から「結」まで終始しており、「宗教的覚醒はどういう内実や転換をわれわれに与えるか」を探求するものである。そのため、本書を親鸞や清沢の思想研究と早合点して単純に読み進めると著

者の意図を取り違え、手段と目的が逆転してしまうだろう。再説になるが、著者が仔細に親鸞と清沢の思索を考究する進め方は手続きとして疎かにできない留意すべき所である。だがむしろこの副題が示す本書は、現実の社会で仏教に生きる道を提示する志願で書かれたのだろう。著者が意識していたか否かは別として、「序」での自殺する若者の話が象徴するように、教えとしての宗教が現実社会に活かされていない現状がある。中でも社会に生きる仏教、社会と共にある仏教を明らかにできていない現状は苦の解消を遠のかせていると実感しているであろう。これに対する応答が現代における宗教的救済の提示であり、現にこの社会を生きる私たちが賜るべき宗教的自覚としての「覚醒」の考察である。本書においては実践として取り組むべき姿の提示であると推察するのである。

ここで課題となるのが「覚醒」ということばである。覚醒論は救済論であるとの著者による定義も本書冒頭に見える。著者には重要な概念であり、このことばの選択には注目すべきである。そこで考えるに、本書はこのことばを信心獲得と等号で結びつけている。観点を変えると覚醒とは死後の人に関係ないことと領解しているのだろう。または、今ここで苦の中に生きるひとに必要なのが覚醒であると述べたいのではないか。つまり、著者にとって「覚醒」が意味するのは現世往生であると評者は捉えている。ここ数年間、親鸞が現世往生を述べていないという考え方が存在している。評者はこれに応答できるほどの知見は持ち合わせていないが、では釈迦は死後をどう述べていたか、そして親鸞は釈迦の教えと相応しているか。私たちは考える必要に迫られているだろう。仏教を明らかにすることにより釈迦は現実に迷い悩むひとを救おうとしたとされている。一方で、清沢は自身の苦悩を契機として自力から他力へと思索を変化させたが、清沢にとっての宗教は「精神的苦悩からの解放という切実な欲求、すな

わち自己の救済」(一七三頁)が目的であると著者は指摘する。では両者の間に位置する親鸞は死後の往生を救済としているか、もしくは親鸞による仏教解釈は釈迦の教えと相応せず、異質なものに变化していたか。より積極的に言えば、親鸞の了解した浄土教とは死後の安楽を願うべきものか、そして、それを清沢は踏襲しているか、との疑問が浮かぶのである。

確かに厳密に字義を捉えるときには死後往生の考え方の妥当性の存在の見込みは排除できないと思うこともある。だが、現実の苦と対決する解決策を求めてみると、現世往生がその利剣になることを著者は親鸞と清沢の思想から見出したであろう。というのも、このような観点が本書全体から感じとれるからである。具体的には第I部では第一章「この現実の娑婆世界において、信心を獲得して浄土の生活を行うこと、これこそが浄土真宗の往生」(一七頁)、第二章「われら衆生は(中略)「現生十種の益」といわれるような現世の利益を、その煩惱の身に賜る」(四一頁)、第四章「衆生が求める如来と浄土は、実は自己の主観的要求の無意識的な投影に過ぎない。ここに、「化身土巻」は(中略)宗教的覚醒へと至る道程とその内実を教示する」(八五頁)、第五章「ここに、信心獲得した者に恵まれる功德の「現在性」が確かめられている」(九七頁)、ほかに多くの箇所に見ることが出来る。また第II部でも特に第五章「清沢は(中略)来世の幸福、つまり死後往生の観念を破って、他力救済の現在性を明らかにしている」(二四五頁)には濃厚に表れている。

しかも著者も清沢を初めとしたいわゆる近代教学を通して親鸞の思想を学んでいるため、仏教における物語的要素をそのまま理解読解しようとする側ではない。宗教の定義は一概に統一できないが、死後の不安への解消のほか

に生の探求であるのなら、近代教学をふまえて考えると、自然に現世往生が肯定されるのは理解できる。そのため著者は親鸞と清沢の教えから丁寧これを拾い上げているのである。そして死後の問題でなく現実の今ここにあり苦悩への対処として、現実世界においての「覚醒」により解消できると著者は主張しているのだろう。これは評者も同じ立場である為の憶説ではあるものの、譲れないものが伺えるのである。

さて、このほかに評者が否応なく目が向いたのは、曾我についての言及である。本書には幾度となく登場するが特に注目したのは曾我の論考にある「阿弥陀仏の光明と衆生煩惱と南無の信心」の關係の模式図についての言及（一八八頁）である。これが清沢による、有限と無限の關係を示した図とまったく同じ内容を説示していると指摘している。そして、清沢の有限無限論を曾我は正確に継承し浄土真宗の思想課題としてあらためて展開したと著者は領解し、金子大榮と併せて、清沢の有限無限論を近代における親鸞教学として顕彰・継承していると結んでいる。評者も示唆を頂いた。この模式図は曾我においても重要であり、ここから後に「如来と我」について深く考察し、ひいては代表的思索である法藏菩薩論へ発展していると評者は捉えている。両図は酷似しており意味する所も近似しているが、ではこれら二つの図から、清沢の哲学的思索を曾我が真宗の教えに継承したと簡単に言えるだろうか。まず事実關係を確認しよう。それぞれの発表年次を伺うと、清沢の図は初期の論考「善惡応法論」一八九一（明治二四）年前後）であり、曾我がこの模式図を論考で発表したのは一九〇九（明治四二）年七月発行の『精神界』上である。確かに曾我は清沢より後年に発表している。では、果たして清沢の影響下に在ったためにこの図を

書いたかという点に関しては疑問が残る。ここで考える手助けになるのが、曾我が模式図考案の前月に発表している論考である。それは「自己を弁護せざる人」(『曾我量深選集』第二卷二二四から二二九頁)であり、清沢の影響が色濃く残る同『精神界』誌上に発表している点も注意が必要である。この論考は清沢の七回忌を縁として追想した文章であるものの、ここには勿論、清沢の有限無限論はない。そして、曾我は「嗚呼われは想へば八年の昔、巢鴨の天地に在りて、筆なる劍を以て先生並に現在の同人を害せんと企てつゝあつたのであります」(『同上』二二五頁)と、他の浩浩洞門弟とは異なり、生前の清沢に対し疑謗を縁として接していたことを吐露している。確かにこの七年前の一九〇二(明治三五)年二月、上野精養軒における京浜仏徒の会での清沢の食卓演説を契機とした邂逅より前、曾我は、清沢とその門弟に対して批判を繰り広げていた。これは例えば「精神主義」所収の各論考(『曾我量深選集』第一卷)が示している。そして、この一年後の一九〇三(明治三六)年三月に清沢が大浜(現在の愛知県碧南市)の西方寺に帰郷した後の浩浩洞に曾我は入洞しているが、同年六月に清沢は没している。

これら史的事項からは、直接面授により清沢から曾我が有限無限論を学んだ結果として模式図の究明発表に結びつけたとはいえない。また、浩浩洞入洞以前に精神主義批判のために、もしくは、清沢不在の浩浩洞に入洞した後の六年間で、論考「善悪応法論」や有限無限に関わる著作に接していたならば話は明瞭であろう。だが清沢の著作の中で何を曾我が読んでいたか評者は見当がつかない。確かに一九〇九年以前から曾我の論考に有限無限ということとは大いに見受けられるが、それらは清沢の有限無限論とは違う意味合いではないだろうか。もしこれを参考にして模式図を作成していれば、曾我のことを、有限無限論を真宗の価値体系の中に展開した清沢の継承者と言い得

るが、果たしてどうだろうか。ところで、上記状況を念頭に置くと、疑謗を縁としながら清沢に近接した曾我だが、その後、この模式図発表時点では清沢を師と考えていたことは論考「自己を弁護せざる人」や他の論考からも明らかである。しかしながら、これまで述べてきたように、清沢の七回忌を契機にして如来と我との関係性の真理を求めた結果、師の考えに酷似した模式図を真宗の教えの中に見出し得たと考えることもできる。もしくは親鸞の仏教理解をもとに仏教の価値体系、信仰を考えて仏と人間について考えてみると、自然に清沢と同じ真理へ到達したと考えるべきか。つまり、曾我の模式図発表は清沢の有限無限に関わる説を根元とするのではなく、親鸞もしくは釈迦にその源流を求めることができるかと評者は考察するのである。外面的にも内面的にも両図が類似していることは認められるべきだが、いずれにせよ、これら考察についての確証がないため著者に曾我を後継者と考えた根拠を尋ねてみたい。

最後に、本書については本校の『仏教文化研究所紀要』第三八号にも「〔合評会報告〕伊東恵深『親鸞と清沢満之』を読む―著者を交えての合評会―」と題して真宗学内外からの書評が掲載されている。当該合評会には、多くの聴衆の中の一人として評者も参加させて頂いた。三人の書評者から発せられた、多角的でありつつそれぞれの専門的立場から見た批判が印象に残っている。また著者による書評者への応答もあるため、一方通行ではない見識の応酬も注目点であろう。これら識者による批判も本書評と併せて参照頂きたい。